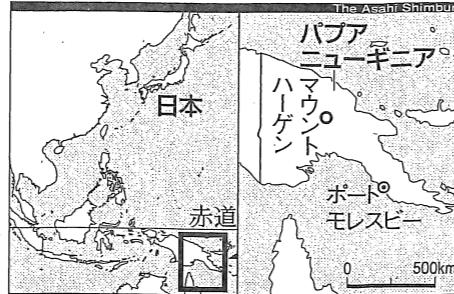


世界発

2011



ドノウが直す 命の道路

簡単な技術・低成本で11カ国に広がる

パ・プ・ア・ニ・ユ・ー・ギ・ニ・ア

太陽が照りこぼれるハツア
ニユーギニア高地。今年1月、西ハイランド州都マウントハーゲンから10キロの山間にあるモゲ族の集落は高揚感に包まれていた。道路整備を喜ぶ女性たちが、歌いながら踊り始めた。

集落から、車が通れる幹線道路までの距離は1・5キロ。この日の作業は、途中の川にかかる長さ115メートルの丸太橋のかけ直しだ。両岸の地盤を土嚢で補強する。

この集落では、収穫したキヤベツやサツマイモを男たちが背負って幹線道路まで運び、市場に向かう業者に売っている。人力で運べるのは1日せいぜい50キロ。耕地があつても市場に出せなければ作物は余るだけ。集落リーダーのジョンさん(47)は耕地の3分の1しか

土嚢^どを使った、日本発の道路整備の技術が、アジアやアフリカの途上国に少しずつ広がっている。人々と市場や医療サービスをつなぐ道路は、貧困克服の力^{カギ}を握る。安くて簡単な工法で住民が自ら道を造り、道を直す。その持続可能性にアジア開発銀行も注目し、事業に採り入れ始めた。

使
て
い
な
い

までトランクが農作物を賣に来てくれる。たくさん売つて、子どもたちを高校に行かせてやりたい」。ジョンさんが話した。

作業を指導するのは木村亮・京都大教授（土木工学）が理事長を務めるN.P.O「道普請人」（京都市）。まず、木村教授が手本を見せた。50袋四方の土嚢袋に砂利を詰めて並べ、木製の器具でたたいて固める。

「おお、石みたいに硬くなつた」。土嚢に触れたピーターさん（50）が声を上げた。他の男性たちも見よう見まねで土嚢を並べる。「おれたちでもできる」。

翌日の工事は集落の人々だけで終えた。木村教授によると、この補強で橋の耐久

いからだ。そのころ土嚢の耐荷力を実証した本を読み、「これだ」と考えた。土嚢袋は一枚25円。1筋の道を直すのにかかるコストは約500円と、アスファルト舗装の20分の1だ。「当然、耐久性では舗装道路に劣る。交通量によつては数年で袋が破れるかもしれない。だが、その時は住民が直せばいい」と木村教授は言う。この道直しが最も広がつ

住民が補修収入増も

木村教授が土壌による道直しに取り組むようになつたきっかけは「ほんまもんの研究者は、簡単な技術で人々を幸せにできる」といふ12年前の恩師の言葉だ。その後、ケニアの大学で教えていた時に、先進国の人間援助は幹線道路まで、人々の生活道路にまでは届かないことを知つた。大雨の度に通れなくなつた。現地には直す技術も、車両を運ぶ道路も、農作物を運ぶ

場から遮断し、現金収入の道を閉ざしていた。「道は自分たちで整備、補修できる」。住民がそろ気付くことが持続可能な開発だと考え、「現地調達できる材料で、安く簡単に直せる技術」を追求した。先進国が整備した舗装道路が、穴ができたまま放置されているのを何度も見てきた。現地には直す技術も、

アシア開発銀行の社会開発スペシャリスト、田中寅子さんは「土地に適した工法と材料を探しだし、現地に技術を伝え、更なる技術移転に成功している。アジアでも活躍して欲しい」と期待する。

ドノウによる補強部分は、アフリカ、アジア11カ国で計13ヶ所におよぶ。(ペニアニュギニア中部マウントハーゲン=金成隆一)

アフリカ諸国

ア開発銀行の事業が進む。ここには近隣住民約4千人が頼る救護所がある。だが幹線道路への山道は10キロもあるうえ、土の道は轍わだちでござい。雨期は水がたまつ

て通行不能になる。ヘルスワーカーのマソさんは「医者は幹線沿いまでしか来ない。この赤ん坊に必要な薬の補充にも来ない」と、傍らで母親に抱かれてせき込む赤ちゃんを見やつた。

この山道を含む延長約80キロの弱い部分を土臺で補強するアジア開銀プロジェクトを道普請人が手がける。土臺を敷き詰め、水を逃す側溝を掘れば、道はでこぼこにならない。

カメリーン、ザンビアの7カ国で道直しを実施。ケニアでは主要英字紙スタンダードが昨夏、大きく取り上げた。「ドノウ技術がケニアで広まっている」。土嚢がDomeになった。

土嚢を作る木村教授||いすれも
パプアニューギニア高地、金成
写す

ているのがアフリカだ。
道普請人は、ケニア、ウ
ガンダ、タンザニア、ガーナ